

♪「五人囃子」♪

Flute, Sax, Viola, Accordion, Percussion のクインテットぶらり訪問記

文中の顔写真はチラシより、また、演奏写真はプログラムより転写いたしました。

日 時 2011年6月17日(金) 開演 19:00
会 場 ルーテル市ヶ谷 コンサートホール

最近読んだ本の中に「会場へは30分前」と言う書き出しの文章があります。外国へ出かけることの無い私は、定刻になると始まるものだと思っていました。しかし、外国での音楽会は実際のところ10分程度遅れて始まるようです。

一見だらしく見えますが、著者のヨーロッパでの体験では、こうして10分程遅らせることによって定刻間際に駆け込む人たちのガタガタする音に煩わされなくてすむし、“音楽を楽しむ前の心の準備にもなる”という訳です。

会場に30分前に着き、1杯のコーヒーでも飲んで、それからゆっくり音楽に気を向けるようにすれば、新鮮な気持ちで音楽が聴けて新しい感動も生まれてくるものようです。

時間間際に駆けつけることの多い私は大いに反省し、まずは実践してみようと早めに家を出て会場近くの喫茶店に入りコーヒーを注文して10分ほど過ごしてみました。すると、私と一つおいて向かい合っておしゃべりしていた若い男女の二人が



五人囃子のチラシを取り出してこれから聴くプログラムについて話し始めました。妙に親近感が湧いてつい顔を見てしまいました。

最初の演奏は「ア

パラチア・ワルツ」プログラムには、5人で奏でる音の重なりを楽しんでいただけたら…とのコメントがあります。アルトサク



ス、ヴィオラ、フルート、ビブラフォン、アコーディオンと楽器は違いますが、それぞれ余韻の出せる楽器だし、人間の声に近い周波数の音域を持ち合わせている楽器の編成ということもあってかお互いの音が溶け込んでどの楽器の音なのかわから

なくなってしまう不思議な響きでした。

例えば、マリンバやビブラホーンのポンポンという音と、ヴィオラの弦を指で弾く音の重なり、マリンバがピアノの音色に聴こえたり。



アコーディオンの鍵盤側のスイッチもH(ハイリード)、M(ミドルリード)、L(ローリード)の組み合わせで、オルガン、ヴァイオリン、オーボエ、トロンボーン、ピッコロ

などと呼ぶこともあるので、お互いに相性の良い楽器の組み合わせだったのではないかと思いました。ただ、アコーディオンがサククスと隣り合っていたせいか五つの楽器が同時に鳴ると他の楽器の音に負けてしまうように感じた点がアコ仲間としてはちょっと残念でした。

前半は全員がパンタロン風の長いズボ



ンだったのであまり目立たなかったのですが、次の「イタリア協奏曲:J.S バッハ」もヴィオラとサクスの方は素足で演奏されていました。何か想いがあったのでし

ょうか。(2部からは全員靴を履いていた)後半の衣装は全員黒で統一していました。

《生演奏には雰囲気がある》

実際に自分がその場において音楽会の雰囲気を感じ取りながら聴くわけですから視覚的な面にも影響されて印象がより強まります。前半後半を通してヴィオラ奏者の動きは新鮮でした。演奏するのが(音を出すのが)楽しくてしょうがないという気持ち身体が動きになって自然に現れるのでしょうか。曲は D.ショスタコービッチの「24 の前奏曲とフーガより:プレリュードⅠ 八長調 / フーガⅩⅣ 変ホ長調 / フーガⅢ 長調など」であったり、星谷丈生の委嘱作品「和声のデザイン2」であったり、A.ピアソラのタンゴ・バレ「街」「出遭い」「キャバレー」などで、私が日頃練習している曲とはかけ離れているものばかりで

したが、森の中に妖精が棲んでいるとしたらきっと彼女のようにヴィオラを弾きながら木陰から片足を上げて躍り出てくるのではないかなと、かつて中央アルプスを縦走中に這松の中で見かけたリスの動きを想わせる身体のこなし方が印象に残りました。まさに CD で聴くのとこの違いを感じた演奏会でした。

最後の曲が終わっても拍手が鳴りやまず、2度、3度とアンコールの催促が続き時間が許せば何時までも聴いていたい演奏でした。



演奏者から、この組み合わせでの演奏は今日が初回で、世界にも例の無い組み合わせなのでレパートリーもこれから自分たちで創っていくことになります。是非これからも応援に駆けつけてくださいとの挨拶で幕が降りました。今後が楽しみです。(乙津:記)

★下のプログラムの写真ではパーカッションはタンバリンを持っていますが当日はマリンバとビブラホーンでした。



パーカッション(岩附智之) ヴィオラ(波田生) サックス(坂口大介) フルート(西田紀子) アコ(津花幸嗣)

